



退魔  
教師  
希彩

羞虐の学園

きさや

小説 天戸祐輝  
挿絵 フリキ

第一章 襲い来る者たち

第二章 忍び寄る者の思惑

第三章 吐き出された触卵

第四章 仕組まれた部活

第五章 孵り出でる稚触手

エピローグ

006

024

081

136

188

251

## 登場人物紹介

Characters



### しほきさや 紫羽希彩

元退魔巫女の女教師。類まれな美貌と、スレンダーながらもグラマラスな肢体を有した美女。現役は引退しているが、巫女として強力な霊力を持っている。

### このうなゆ 湖納那柚

主人公が顧問する水泳部の少女。人より強い霊力を有するが、本人は自覚がない。水泳部のエース的な存在。



### そくだやらく 束拿矢落

希彩の勤務する栖候学園の学園長。人のいい人格者だが、やや気の弱そうな言動をしている。

### いがのうせい 畏蛾囊政

体育教師。プロレスラーのような肉体を持ついやらしい男。



肉悦を受けた乳芽は、限界まで痾り尖りながら小さな布を押し上げ、水中で大きく揺れるベル型の峰乳を生徒たちに晒し。淫部に至っては淫唇が左右に広がり、紐のようなクロツチからプックリと膨らんだ女肉がはみ出している。

「わっ、わたしはもう出るわ、あとは好きに泳ぎなさい……」

頬を紅く染めてプールから上がり、肢体から水を滴らせながら更衣室に向かおうとする美女教師。裸に近いその肢体には幾多の視線が這い回り、まるで集団で陵辱されているような錯覚を彼女に与えてくる。

（大丈夫、更衣室で一人になれば……この感覚はすぐに……）

床に崩れてしまいそうな焦燥感を全身から感じつつ、希彩は更衣室へと向かっていく。

「おっと希彩先生、少し疲れて身体がふらついているんじゃないか？ 俺が生徒に教えながら、マッサージでもしてやるよ」

プルプルと太腿の筋肉を震わせ、後数歩で更衣室のドアを開け視辱から解放されると思った直後。今まで生徒の暴走を見ただけだった畏蛾がいきなり彼女の前に立ち塞がり、水滴を伝わせながら揺れる峰乳や、透けた布を押し上げる淫核をいやらしい眼で見ながらマッサージを申し出てきた。

「いえ、お断りしますわ。シャワーでも浴びれば治りますので」

「遠慮する事はねえよ、それとも、断るのなら別の女で……」

「くっ！」

畏蛾の不敵な笑みとその姿から、何をしようとしているのか想像できる。そして、淫欲の色を滲ませた眼光が、断れば那柚たちに危害が加えられる事も物語っている。

「……わかりました……わ………お願いします……」

これから始まるであろう恥辱に唇を噛み締めながら、希彩は体育教師の提案を呑んだ。

「ではこの長椅子に仰向けで寝ろ、気持ちよくさせてやる」

神経に障る命令口調を聞きながら、無言でプールサイドに設置されたカーボン製の長椅子に仰向けで寝そべっていく。上を向いても形の崩れない肉果実は、プリンのように柔らかく揺れながら、布を押し上げた頂で真っ直ぐ天井を突き刺し、淫唇がはみ出した淫部には、冷たくも心地いい室内プールの空気が撫で上げていく。

先ほどまでプールに入っていた為に、肌には無数の水滴が付着してキラキラと輝き、長椅子の上に寝そべった彼女を幻想的な美しさで彩ってきた。

「さあ、お前たち集まれ、今から俺がいいものを見せてやる」

畏蛾が美女教師の恥辱を煽るように、今まで彼女の肢体を触っていた男子たちを長椅子の周りに集めた。

(もう見ないで……こんな姿もう……)

解剖されるカエルのように長椅子で仰向けになり、男子たちの視線で肢体を隅々まで視辱される希彩。興奮した男子の壁に囲まれながら、体育教師の姿を見た彼女の身体には、学園長に教え込まされた肉欲への期待感と、皆に見られながら陵辱される戦慄が同時に趨



り抜けていく。

「よく見ている。へへ……」

「んああ……うう……っ……ふううう……」

体育教師の筋肉質な手が、プロレスラーのような見た目からでは想像できない優しさで肌に触れ、首筋から胸元へと撫で回してきた。その柔羽で撫でられるようなくすぐったさに、生徒の手と淫毒で過敏にされた彼女の身体はピクピクと反応し、唇から濡れた吐息が洩れてしまう。

「この程度で声を出してどうする？ 次はこの大きな胸をマッサージしてやるぜ」

「うう……んはあつつつ……はう……んふうつつつ！」

胸元を撫で回していたゴツイ手が峰乳へと目標を移し、柔房を握り潰すような力強さで鷲掴みにしてきた。女に快楽を与えず、衆人環視の中で自らの欲望をぶつけてくるような屈辱的な行為。しかし、今の彼女にはそんな事は気にはならなかった。

疼いていた肉体に感じる、僅かな痛みと圧迫した肉果実の快楽に心を奪われ、柔房に喰い込んでくる陵辱の指に詰まった吐息を奏でてしまう。体育教師の手は、指を柔らかな乳肌を喰い込ませたまま円を描くように揉みしだき、数時間ぶりに心地いい圧迫感を希彩に与え、胸の刺激に陶醉させてくる。

(あふっ……こんな男に触られて……嫌なはずなのに……わたしは……)

どんなに心で拒み、肉悦を感じないようにしても、二孔の中で淫毒を撒き散らされる肉



体が肉刺激を欲してしまう。幾多の生徒に見られながら揉みしだかれる肉果実は、力強く指を喰い込まされていなければ耐えられないほど疼き、艶めかしい吐息が男たちを誘惑するように室内プールに木霊していく。淫部では、透けた水着越しに左右に広がった淫唇がうねっているのが見え、その奥で薄紅色の粘膜に佇む小さな秘孔が、何かを待ち望んでいるようにヒクヒクと蠢いてしまった。

「こんなイヤらしい水着で指導を行うとは、噂通りの淫乱だな。俺が解消してやるぜ……チャブッ……」

「ひゃんんんっ！ はうっ……吸わない……はあく……」

言葉で美女教師を辱めながら、畏蛾が呼吸に合わせて揺れている左の肉果実に貌を近づけ、小さな水着布を押し上げていた乳芽に吸いつけてきた。布越しとはいえ、生暖かい唾液をまぶされながらザラついた舌を這わされる頂からは、まるで乳芽全体を細毛で撫で回されたようなくすぐったさが生まれ、乳肌にかかってくるこそばゆい鼻息と共に、背筋を痺れさせるような乳悦感を脳へと伝えてくる。

「いい反応するじゃねえか、こっちも可愛がつてやる」

「んう……はあはあ……やめ……どこに指を……はくっ!？」

右胸から彼の左手が離れ、胸から腹部、そして股間部へと撫で移り、水着の紐クロッチごと淫唇の奥にまで中指を喰い込ませてきた。柔らかな淫唇に触れながら秘孔に触れてきた男の指に、肢体をピクンッと跳ねさせながらも自然と腰を動かし、指腹に秘粘膜を擦り

付けてしまう美女教師。彼女の子宮はキュンキュンと収縮しながら女蜜を滲ませ、いつ挿入されてもいいように膣全体を潤ませていく。

「やっ、やめてくださいい畏蛾先生……あふっ……生徒の前でこんな……」

「何を言っているんだ？ 俺は女の身体をマッサージするやり方を生徒に教えてやっているだけだ。勝手に感じて声を出しているのはお前の方だろ、この淫乱、チャプッ！」

「わたしはそんな女じゃ……くふうんんんんっつうっつ！」

辱めの言葉を否定しようとした言葉が止められ、唇から悩ましくも淫欲に濡れた声を奏でてしまった。巨峰乳と淫部を嬲っていた体育教師が水着を退かし、彼女の敏感な部分に汚らしい舌と指先で触れてきたのだ。ザラついた舌に舐められた乳芽には、ヤスリで擦られたような痛痒い刺激が趨りまくり。太い指で嬲られた秘孔からは雌の痺れが生まれ、肉体の芯を痺れさせながらジワジワと全身へと広がり、美女教師の精神を掻き乱していく。

「希彩先生のこんな姿、見てていいのかな」

「でも、俺もう目が離せねえ……」

美女教師を淫らにマッサージする畏蛾の姿に、生徒たちの間に僅かな罪悪感が生まれる。だが誰一人としてこの場から離れる者はなく、淫らな姿を晒す彼女の姿から目が離せない。中には全て目に焼きつけようと、瞬きも忘れて肢体を凝視している者までいた。

「くはっ……んん……もうやめ……ひふっ！ はあはあはあ……くああんんっ！」

乳芽に軽く歯が立てられ、乳芽全体に感じる痛痒さと、秘孔に太い指がズブリと突き入

れ膣壁を擦られるムズ痒さが脊髄で絡まり、肉欲に抗う脳を直撃してきた。その上下から感じた悦刺激に、肢体は尿意を我慢するように美脚をくねらせながら長椅子の上で悶え、子宮が雄液を求めて収縮し始めてしまう。

女の反応を始めた秘孔は、男の指が浅く出入りする度に女蜜が溢れ出し。汚らしい口で貪られる乳芽が、真円の乳輪までプックリと膨らませて陵辱者の眼を楽しませている。

「うはっ……はあはあはあ……身体が……熱い……あふっ！」

肢体を舌と手で嬲られ、膣を指先でまさぐられる悦痒さに、淫毒で侵された希彩の理性が薄れ始めた。生徒に見られながら痴態を晒す背徳的な行為に、徐々に心が淫欲色に染まり、もつと淫らな姿を見せたいという邪な感情に支配されていく。

整えられた眉をハの字に下げ、高熱を出したように潤んだ青い瞳は、自分の淫姿を眺める生徒たちの股間部を映し、競泳用パンツから槍先をはみ出させるほど勃起したモノに、思わず固唾を呑み込んでしまった。

(ダメよ……ダメッ! あんなモノを欲しがると、でも……)

男を知った膣と子宮の反応。そして男子たちの股間を瞳に映したまま離す事のできない自分に、肉体が何を欲しているのか理解できる。それが膣や腸内に忍び込まされた触手蛇の仕業だと解っているが、潔癖な退魔巫女として育った彼女には、その感情自体が自分の心に湧き上がってくる事が許せなかった。

しかし、肉体はそんな彼女を泥沼に引きずり込むように全身を熱くさせ、畏蛾に嬲られ

る乳芽と秘孔から発生する女痒さで、潔癖な脳を煮え滾らせていく。

「うあ……はあはあはあ……違う……わたしは欲しくなんてない……」

誰に言われた訳でもなく、高熱にうなされてるように身をくねらせながら、濡れた声で肉欲を否定する。その姿に、肉悦に抵抗する限界を感じた体育教師は、熱い吐息を繰り返す彼女の身体から離れ、長椅子の上で鶉色の乳芽をフルフルと震わせ、秘孔から愛液を溢れさす美女の淫姿を眺めた。

「もう我慢の限界のようだな希彩先生。だったらそこで四つん這いになり、そのデカイ尻を俺に向ける！生徒に見せながら最高のマッサージュをしてやる」

「だっ、んっ……誰が貴方の命令なんて……はふう……うう……」

神経に障る声で、畏蛾が淫熱に身悶えする美女教師に命令してきた。無論そんな言葉に素直に従う希彩ではない。しかし、淫熱に燃え盛る肉体と、揉みしだいてくる手を失い切なく疼く巨峰乳。そして手を突っ込んで掻き巻りたくなるほど女疼きに苛まれた秘孔が、もう彼女の言う事を聞かない。

熱く火照った肢体は、淫部から愛液を滴らせながら娼婦のように動き、長椅子の上に両手を着き四つん這いになると、幾多の欲望視線に貫かれながら、紐水着で彩られた魅惑的な桃尻を体育教師に掲げてしまった。

（ああ……こんな事、もう嫌なのに……身体が熱くて……わたし……）

嫌われ者の命令に素直に従ってしまった悔しさに涙が浮かび、心が取り返しのつかない

闇に踏み込んでしまったように黒く染まっていく。自ら挿入をねだる姿勢になった彼女の肢体には、下を向いても型崩れしない肉果実や、挿入を待ち切れず愛液にまみれてヒクついている秘孔が、幾多の視辱に嬲られて身悶えするような痒みを全身に伝えてくる。

一本の紐で彩られている大きな桃尻には、その割れ目で小さく佇んでいる色素の沈着していない窄みまで視線が突き刺さり、恥ずべき部分まで興奮した男子たち見せてしまった背徳的な喜びが、潔癖な精神に刻まれてきた。

「くくっ、俺の命令を素直に聞くなんて、そんなに我慢ができないのかよ、雌犬っ！」

パシッ！ プシユウウッ！

「あうっ！」

畏蛾が侮蔑の言葉と共に、大きな桃尻を張り叩いてきた。その痛みに彼女の唇からは悲鳴が上がり、痛悦感に秘孔からは愛液がしぶいてしまう。

「くくくっ！ 叩かれて愛液を垂れ流す淫乱にはお似合いの姿だぜ。今すぐに望みのモノをこの雌孔に突っ込んで、ヒィヒィ言わせてやる！」

「やだ……欲しくなんてないのに……そんなモノ……欲しくは……はくっ!？」

心とは相反して肉体が欲する雄槍に、弱々しくも拒絶の言葉を口にする。だが彼が着ていたジャージのズボンを下ろし、秘孔にゴム塊を思わせる硬く熱い切っ先を触れさせてきた途端、彼女の唇からは戸惑いと期待の入り混じった呻きが洩れてしまった。

（気持ち悪いっ！ こんな男のモノなんて気持ち悪いだけなのに……どうしてわたしの身

体は……)

心では畏蛾のペニスに嫌悪を感じ、今すぐにも秘孔から離したいと願っている。しかし、その猛り熱を近くで感じてしまった膣が壁をうねらせながら挿入を待ち望み、意思に反して肉体を動かす事ができない。

「マ○コをヒクつかせながら待ちやがって、そんなに俺のチンポが欲しいのかよ」

「待ってなんか……ひゃふっ、んう……」

亀頭で膣口を辿りながらかけられた言葉に、希彩は吐息を吐きながら反論した。だが、どんなに口で抵抗したところで肉体は四つん這いの体勢から動かず、秘孔が亀頭を啜え込もうと蠢き立ってしまう。

(嫌だ……嫌だっ！　こんな下劣な男にまで穢されるなんて……こんな奴の汚いペニスを膣内に挿入されるなんて……くうっ!?)

嫌っている男に陵辱される悔しさに心の中で叫び、自分の全てが彼のモノで腐食させられるような感覚に襲われた瞬間、淫部に当たっていた亀頭がゆっくりと挿入されてきた。

「クク……、さあお待ちかねのモノだ、俺たちが愛し合う姿を生徒たちに見せて、もっと奴らを興奮させてやろうぜ、そらっ！」

ジュプッ！　ジュリユジュプジュルウウウウウウウ……。

「んはっ！　くはあああああああああああああッ！　挿入<sup>はい</sup>つてくる……はくッ！　わたしの膣内に硬いのが……あふッ、くうんんんんんん……ッ！」

小さな秘孔を押し広げ、処女と変わらないほど狭い膣内に、鍛えられた男の肉槍が突き刺さってきた。触手を融合させた学園長のモノよりは小さい彼の肉槍は、それでも女孔を内部から押し広げる拡張感で肉体を包み、雄肉を迎え入れた幸福感を与えてくる。

「んはッ……くるッ……きちゃうううううッ……ッ……」

一回り太い切っ先が幾枚もの膣襞を捲り返し、無数の膣粒を擦り潰しながら奥へと侵入してくる。その悦痺れに肢体は震え、子宮が胎内で激しく収縮していく。だが彼のモノは短く、秘孔に根元まで納まってでも子宮口にまでは届かない。

「はくッ……そんな……これじゃわたし……」

淫根を膣内に挿入されてしまった事で全ての抵抗心が碎かれた希彩は、もっと深い挿入を求めながら眉を下げた美貌を後ろに向け、四つん這いで掲げたお尻を振った。だが畏蛾の腹部は桃尻にピッタリとくっつき、どんなに望んでも子宮口に龟头は当たってこない。

（ああっ!? わたしは、どうしてこんな事を……）

思わず行ってしまった淫らな仕種にハッととなり、慌てて唇を噛み締めて美貌を俯かせる。だがもう遅い。美女教師が瞬間的に求めてしまった姿は、ここに居る全ての男子が目撃し、桃尻に指を喰い込ませながら彼女を貫いている畏蛾を興奮させてしまっている。

昨晩まで処女だった膣は、その狭さときつき、更に生来の膣襞の蠢きと膣粒の多さで肉幹に絡み付き、射精を促すように秘孔から子宮へと大きくうねり始めた。

「ぐうおお、凄えぞ……こんなマ○コ初めてだぜ、おうっ！ 突いてやる……お前をあの

ジジイになんて勿体ない お前は俺の物だつ！」

ジュプッ！ ジュリユ……ジュプジュリユッ！

「んはあああッ！ あくッ……わたしは誰の物でも……あうううッ！」

昨晚、学園長に処女を貫かれ、何度も濡れた声で喘がされた彼女の姿に、畏蛾はよほど犯したい衝動を我慢していたのだろう。射精欲を抑える事もなく四つん這いの美女を貫く彼は、衆人環視の中で美女を陵辱する優越感に身を昂らせ、男子たちに見せつけるように腰を桃尻に叩きつけ、きつ過ぎる秘孔を捲り返し始めた。

「くはあああッ……あふッ、あくッ……激しい……んッ……んひいいい……」

大きなストロークで膣内を擦られ、無数の膣壁を度に弱電流にも似た女痺れが肢体中に廻り回り、堪え切れない嬌声と共に秘孔から大量の愛液が溢れ出していく。熱い雄肉を受け入れた膣からは、本人の意思に拘らず女の喜びが生まれて精神を包み込み、希彩から陵辱される屈辱感と抵抗心を奪っていく。

ジュプッ！ ジュチャジュプ……ジュリユッ！ ジュプッ！

「くおっ！ チ○ポにマ○コが喰らい付いたまま離れようとしねえ！ おうっ!? そんなに締め付けるなよ淫乱っ、これじゃ射精しちまうだろうが……おうっ、くうおお……」

「わっ、わたしは何も……んあッ！ 締め付けて……なんて……ああうッ！ はッ、ひやうッ、はあああッ！ ダメ……身体がもう……あッ、あッ、あッ、はあうんッ！」

今まで犯してきた少女たちよりもきつく、無数の膣粒が付着した鬘をネットリと絡ませ



ながら扱く膣の具合に、畏蛾は我を忘れたように腰を振り、美しい肢体を貫き続けた。

激しいピストンで犯される希彩の身体も、下腹部から広がってくる悦流に耐えられず、彼の動きに呼応するように腰をくねらせ、大きな桃尻を左右に振ってしまふ。唇からは喘ぎと共に唾液まで零れ、長椅子につけた両手が肉悦に耐えるように爪を立てた。

(ひゃうッ！ わたしこのままじゃ……イッちゃう……生徒に見られているのに……あんなにアソコを大きくしている男子に見られながら……)

突かれる衝撃で身体を揺さ振られながら、目尻を下げて潤んだ切れ長の瞳に、男子たちの勃起したペニスを映し、その背徳的な快楽に潔癖な精神を染め始めた瞬間。

「くっ！ もう我慢ができませんっ！ 出るぞ……射精……くっおお——っつ！」  
びゅぶるるっ！ どうぴゅ……びいびゆるるるっつっ！

「はあふううう——ッ!? 熱ッ……はふッ……もう出て……ふはッ……」

彼女の膣に耐え切れなくなった畏蛾が短く吠え、射精を促すように蠢いていた膣内に溶け鉄を思わせる熱い雄液を迸らせてきた。自分勝手な欲望と快楽に吐き出された精液は、絶頂に達する事もできず女疼きに苛まれる美女の膣内を白濁色に染め、膣の蠕動と共に子宮内へと送られ触手卵の栄養となっていく。

「ふあ……ああッ……勝手に……んう……はあはあ……」

達せなかった肉悦の頂点に、Gカップの峰乳を長椅子の上でひしゃげさせながら上半身を突っ伏し、希彩は荒い息を繰り返した。魅力的な桃尻だけを掲げ、膣に射精した肉槍を

突き刺された肢体は、全身の肌に玉のような汗を伝わせながら、秘孔と肉幹の隙間から濃度を増した愛液がトロリと溢れ滴っていく。

目の前で膣内射精をされた美女教師の淫姿を見た男子たちは、皆息を呑んだまま目を吸いつかせ、性欲を抑えられないように勃起したモノをパンツ越しに押さえつけている。

「どうだ俺の精液の味は？ ジジイの物と違って濃くて美味いだろう……」

「はくッ……はあ……はあ……う……精液なんて……気持ち悪いだけよ……あうッ!?」

自分の精力によほど自信があるのだろう。パシッと桃尻を叩いた体育教師は、萎える事なく秘孔を貫いたペニスで白濁の絡まった膣内を掻き混ぜながら、生徒たちの前で辱めの言葉を投げ付けてきた。だが、彼の精液は触手を融合させた学園長の陵辱液ほど濃くも熱くもなく、その粘液感触だけで希彩に絶頂を与える事はない。

「いいマ○コだったぜ希彩、これからもっと楽しませてやる」

「んふあっ!? んっ……もうこれ以上貴方なんかにつ！」

興奮に息を荒げながら、勃起したままのペニスを秘孔から引き抜いた畏蛾は、体液の付着した槍先で手の跡が残る桃尻を撫で、円を描くように男女の混合液を塗り込めた。

絶頂に昇れず、激しい疼きに苛まれながらも、これ以上淫らな姿を生徒に見せる訳にはいかないと、希彩は欲してしまいそうになる肉悦を拒み、お尻から伝わってくる蟲悦的なくすぐったさに耐える。

しかし、一人で美女を犯す愉悦を味わった男の陵辱心は止まらない。槍先でお尻を撫で

回した彼は、ポツカリと空いた秘孔を覗き込む男子たちに見せるように、ゆっくりとお尻の谷間を通っていた紐を退かし、熱い切っ先を薄赤い窄みに押し付けてきた。

「はうっ!? どこに当て……」

布越しではなく、初めて尻孔に感じた雄熱の感触に、彼が何をしようとしているのかを悟った希彩はその身を震わせた。畏蛾は、まだ挿入経験のない尻孔を生徒たちに見せつけながら貫き、その悲鳴を聞かせようとしているのだ。

「こんな具合のいいマ○コをしている身体なんだ、こっちの経験も当然あるんだろ」

「やめ……て……」

希彩が昨夜処女を失った事は、すぐそばで那袖を犯しながら見ていた体育教師は当然知っている。彼はそれを知った上で、美女教師の尻処女を奪おうとしているのだ。男の貌は欲望に身を染めた醜い貌となり、尻処女を奪われる美女の背筋には冷たい汗が伝っていく。

「お願い……そんな事は……」

長椅子に上半身をつ伏したまま、お尻を掲げた下半身に視線を向け、青い瞳を震わせ、尻処女を奪わないように懇願する。だが、肉体は新たな挿入に歓喜しているよう震え、自分の意思では動かす事ができない。

尻孔は微妙な動きを繰り返しながら、ゴム塊を思わせる雄槍の切っ先に小さな窄みを擦り付け、侵入している触手蛇によって快楽を知ってしまった腸内がうねっていく。

(どうしてお尻がこんなに……これでは待っているみたいじゃないっ!?)

勝手にうねってしまう腸壁の動きに悔しさを感じ、自分の肉体が徐々に変わっているのを強く感じてしまう。絶頂に達せず熱くなつたままの脳は正常な判断さえできなくなり、掲げたお尻を降ろそうとはしない。

「いくぜ希彩、この大きな尻にぶち込んでやるっ！」

「嫌っ！ お尻でなんて……あぐっ!? やめ……て……ひいぐッ！ ぎゃひいひいひい  
ひいひいひいひい——ッ！」

又プッ！ ニユプぢゆにゆニユプウウウウウウツツッ！

「くはあああッ！ イヤッ……お尻っ……お尻はイヤああああッ！」

焼けた鉄棒を思わせる雄槍が尻孔の皺を押し広げ、激痛を加えながらきつい直腸をくぐり、蛇腹状の腸内に突き刺さってきた。昨夜の処女喪失と同じく、後ろ孔の貫通に美女教師の肉体には身体を真つ二つに裂かれたような激痛が駆け巡り、肉悦に逆らえなくなった肢体を虐げてくる。

「痛いッ！ 痛ッ……抜いてッ！ もう抜いてええええッ！」

肉体を虐げてくる激痛から逃れるように長椅子の上で暴れ、突っ伏していた上半身を起き上げらせて、ポコポコと腸壁に填まりながら挿入されてくる雄槍を引き抜こうとする。

だが彼女が上半身を起こした事で、背面座位のような体勢になった陵辱者は、グラマラスな肢体を逃さないように後ろから大きな肉果実を両手で鷲掴みにし、グイグイと淫根をお尻に埋め込んでくる。



「おおっ！ そんなに痛がるなんて、こっちは処女だったのかよ。淫乱だからこっちの孔もチンポを啜えた経験があると思ってたぜ！」

（あぐううう……知っていた癖に……この変態……）

生徒に尻処女の喪失を見せながら、背後から辱めの言葉を吐いてくる畏蛾。しかし、お尻の激痛と拡張感に苛まれている希彩には、その言葉に反抗する声が出せない。

ピンクルージュの唇は詰まった吐息を繰り返すだけで精一杯になり、暴れていた肉体は、尻処女の喪失に硬直したまま動かす事ができなくなっている。後ろから鷲掴みにされた胸は、数分ぶりに味わった心地いい乳悦感に、肌を張りながら鶺鴒色の頂を小刻みに震わせ、射精を受けた膣は、秘孔をポツカリと空けたまま膣壁を晒し、精液と愛液の混合液が絡まった膣襞を披露している。

「うぐうあああ……あぐッ……ぐひいい……」

恥ずべき姿を男子生徒に晒しながら、苦しげな息を繰り返して肢体を震わせる美女教師。その額からはジツトリとした汗が滲み、感じている痛みを観衆に伝えるように、唇の端からは唾液が零れ、紅く染まった頬にゆつくりと伝わせていく。

「ぐお……全部挿入ったぜ希彩……おうっ、きつ過ぎて俺のチンポが潰れちまいそうだ」

「あぐッ……はあはあはあ……変態……ッ……」

苦しげな呼吸を繰り返しながら、背中に鍛えられた身体を押し付けてきた畏蛾の淫欲まみれの貌を瞳に映し、精一杯の侮蔑の言葉を浴びせる。

「何言ってやがる。生徒に見られながらマ○コから精液垂れ流し、尻孔まで犯されたお前の方が羞恥心の欠片もない変態女じゃねえか！ クチュッ！」

「んふうッ!? んふうううう——ッッッ！」

後ろに向けていた美貌に、突然畏蛾が角ばった貌を寄せて唇を重ねてきた。生徒たちの前で秘孔を貫かれ、処女尻まで奪われた希彩はあまりの驚きに抵抗もできず、軟体動物を思わせる動きで口腔に侵入してきた男の舌に、青い瞳を見開き震わせてしまう。

(そんなっ！ 好きでもない人に唇まで……初めてなのに……わたしの初めて全部……)

学園長に犯され、処女を失った時でも、口淫はさせられたがキスを奪われる事はなかった。全ての処女、そしてファーストキスまで奪われて魂まで穢された思いにされた彼女は、自身の無残さにその身を強張らせ、可憐な舌を貪られながら悲しみの涙を零した。

「んあ……んん……クチャッ……んふ……ふうああ……」

数十秒間舌を貪られ、唾液の端を架けられながら唇を解放された希彩は、全ての力を失ったかのように背後に居る男に肢体を預け、桃尻に硬い腹筋の感触を受けながら両腕をダラリと下げた。瞳からは全てを無残に奪われた悲しみの涙が止まらず溢れ、肢体には興奮した男子の視線が無数に突き刺さってくる。

「キスしてやった途端大人しくなりやがって、そんなに疼いてるんなら、激しくヤッてやるよっ！ そらっ、このっ、おらっ！」

「ずぢゅぷっ！ にゅぷっ！ ずぶっ！ じゅにゅっ！」

「くはあんんッ！ もつと激しく……あうッ！ もつと奥まで突いてッ！ はふううううッ……チュパッ！ むんあふ……んン……みんなの熱い精液……チュふ……むんうふ……んッ、んッ、んふぁッ！ いっぱいわたしのオマ○コの中に注いで……ッ！」

ジュプッ……ジュチャジュリユ……ニユプッ！ ジュリユッ！

部活を装った輪姦を受けた翌日の昼。希彩は男子生徒用の更衣室で黒い下着姿となり、口と胸、そして秘孔を使って四人の男子と肉交を繰り広げていた。

ピンクレースのフリルが付いたハーフカップのブラに、際どいハイレグのショーツ。いつもの白下着と同じデザインだが、黒を基調とされたその下着は、立ったまま四人の男子と肉交する今の彼女を、妖絶な娼婦のように彩っている。

「くうおお……希彩先生がこんなにエロイなんて思わなかったぜ……」

「俺なんてもう三回は射精してるのに、また出そうだあ……」

「チュパッ……射精してえ……あふッ！ もつと……もつとおおお……」

ブラをずらし下げて露出させた巨峰乳を、自ら寄せ上げて肉槍を包み込み、上下に揺さ振りながら激しく乳奉仕を繰り返す希彩。既に白濁まみれとなっている乳肌では、尖り勃った頂が擦れ合う度に身を跳ねさせたくなるムズ痒さが胸を包み、ニチャニチャと粘質な音が鳴ってしまう。

「素敵よこのペニス……チュパッ……また精液出させてあげる……はむッ……ンッ……ん……ンちゅぱッ！ はあんん……チュルル……」



「ああ……希彩先生……そんな事されたら、また射精ちやうよ……」

淫蕩な笑みを浮かべる貌では、何十本もの奉仕で慣れた口淫を目の前に立っている男子に施していた。喉肌を膨らませながらの息苦しい口淫に自身の興奮が高まり、口腔での鈴口責めで味わう淫根の汗味が堪らなく愛おしく感じた。

「ふふふ……オマ○コに射精してくれるなら我慢しないでいいのに……チャプッ……んッ、んッ、んッ……ンふああああッ！」

突如口淫していた美女教師が嬌声を張り上げ、全身を震わせ始めた。

ショーツのクロッチをふつくらとした女肉に引っ掛けて淫部から退かし、残ったもう一人の男子に貫かせていた秘孔から、軽い絶頂のような痺れが趨ってきたのだ。

「先生のオマ○コ、何回犯しても最高だぜ……おうっ！」

「んああッ！ んう……ありがとう……君のペニスもとってもいいわよ……あんっ！」

野太い肉槍を啜えた秘孔に入れさせる男子を淫らな言葉で昂らせ、ポッカリと空いた尻孔からダラダラと溢れる陵辱液を見せながら、更に彼を興奮させる美女。

既に彼らと何度も肉交を重ね、肢体の至る所を白濁液まみれにした彼女は、身動きする度に言葉と仕種で男子たちを興奮させ、彼らの射精欲を高めていく。

「ああふッ！ はくッ！ ん、んッ！ チュパッ！ 出しなさい……皆わたしのオマ○コの中に射精してッ！」

男子たちの昂った声と同時に、喉肌を膨らませて龟头を擦らせていた喉粘膜や、大きな





秘孔を貫いていた男子が、膣の狭隘さと奥へと舐め蠢いていく褰と壁の蠕動に耐えられず、数度目の精を彼女の膣内に送らせてきた。何度もの肉交と膣内射精で、内粘膜に雄液を注がれるだけで絶頂してしまう身体になってしまった希彩は、その火傷するような熱さと子宮に流れ込んでくる粘液感触だけで軽く達し、その肢体を痺れさせながら、秘孔と肉幹の隙間から愛液を噴き出してしまった。

「くはあああああ……熱いッ……んああ……はふッ、んッ、もつと……」

軽い絶頂に達しても、膣と腸に巢食った触手蛇が暴れながら淫毒を吐いている彼女の身体は、肉交に対する欲求が消える事はない。大量の精液を求める美女は、お尻を左右に振りながら秘孔を締め付け、最後の一滴まで搾り取ろうと膣を蠕動させる。

「このっ、早く退けよっ！」

胸奉仕を受けていた男子が、射精した後もペニスを膣に納めて快樂の余韻に浸っていた男子を押し退け、今にも射精しそうな肉槍を同時に秘孔に押し付けてきた。

「いくよ希彩先生、うお……おとおおおっ！」

「早く退け、俺ももう……ぐうああっ！」

ぶびゆるるッ！ どぶッ！ つどぶびゆるびゆぶつっ！

「はううッ！ あうッ……はくうんんんんんん——ッ！」

巨峰乳で奉仕を受けていた男子は、秘孔に突き入れたと同時にペニス全体を激しく震わせ、褰を擦り上げながら陵辱液を吐き出してきた。白濁液を褰や壁に絡ませながら奥へと

向かってくる雄槍は、精液の熱さで美女教師を再び軽い絶頂へと押し上げ、美しい肢体を痙攣させてしまう。

「くああああ……ッ！　いいの……気持ちいい……」

ウツトリとした淫貌を浮かべながら膣内に吐き出される精液を堪能し、立て続けの絶頂に身を震わせる美女教師。その太腿には愛液と共に秘孔から溢れた精液が伝い、艶めかしい美脚を淫妖に彩っていく。

「うわああああっ！　早く、早く退いてくれよっ、俺もう……もうっ！」

びゅびゅるるるっ！　ぶりゅっ……っ！

絶頂に呻く美女の唇で奉仕を受けていた男子が、その美唇からペニスを引き抜いたと同時に亀頭を膨らまし、全体を震えさせながら白濁液を噴出させてきた。

我慢できず雄尿道から吐き出された白濁粘液は、そのまま恍惚の笑みを浮かべる希彩の眉間へとぶち当たり、美貌を白く染めながら噎せ返る雄臭で鼻腔の奥を貫いてくる。

「うぷうああ……、貌じゃなくて早く……」

「はっ、はい……くっ！」

美女教師の貌を白く染めた男子が、彼女の言葉に促されて動き、噴出し続ける精液で大きな肉果実や腹部を穢しながら、秘孔へと近づいてきた。

「早く……早くうう……」

秘孔に埋まっていた二人目の雄槍を自分から引き抜き、口で射精した男子に精液が溢れ

返る秘孔を向け、指で割り広げて挿入をねだった。

「うおおおっ！」

ジュププププッ！ ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！

「くはああああッ！ あぐッ、ひゃうッ、んはッ！ いいッ！」

射精しながら立ちバツクの体勢で突き込まれた雄器官に、希彩は歓喜の悲鳴をあげながら肢体をガクガクと痙攣させ始めた。体外射精したにも拘らず、彼のペニスは膣の締め付けと鬚の蠢きにその硬度を保ち、熱し鉄の如き熱さで彼女の胎内でピストンし、その肢体をロッカーに押し付けて連続射精に向け急速に駆け昇っていく。

白く穢れた頬と上半身を冷たいロッカーに押し付け、丸く潰れた峰乳と指を広げた両手で激しい膣突きに耐える美女。その肢体には、連続で膣内に吐き出された雄液が淫根のピストンに合わせて膣粘膜に擦り込まれ、絶える事のない女悦となつて駆け巡っている。

「はんんんんんッッッ！ 精液がオマ○コに染み込んで……ロッカーも冷たくて……最高……」

上半身を冷たいロッカーに押し付け、潰れ広がった肉果実の頂が、秘孔を貫かれる衝撃に合わせて『く』の字に折れ曲がり、陶醉してしまいそうな乳痒さを胸全体に広げていく。

希彩は肉刺激に肢体をブルブルと震わせ、恍惚の笑みを浮かべて歓喜の淫声を洩らした。

「くはああああッ！ すごいッ！ 乳首が擦れてオマ○コが痺れ……早く来てッ！ わたしもう……もううううッ！」









っ先に觸られる淫部を隠そうと、愛液にまみれた太腿を擦り合わせてみるが、新たに両脚に絡み付いてきた陵辱肉が脚を左右に開かせ、強引にM字開脚の状態にして濡れた淫部を東拿の眼前に突き出されてしまった。

「嫌っ！ 見ないで……こんな姿……みんなにまで……」

ショーツのクロッチをモコモコと膨らませ、秘孔と尻孔を觸つてくる触手たち。その部分を見せまいと太腿に力を込めてみるが、愛液に濡れた貞操筋がピクピクと痙攣するだけで意味がなく、両腕は別の触手に絡み取られ手で隠す事もできない。

何もできず触手に吊られ觸られる肢体には、更に熱い視線が幾つも突き刺さり、下着越しに老男に直視される淫部が、挿入による快楽を求めて激しく疼いてしまう。

（くはあ……もう耐えられない……身体中熱いの……焦らされ続けるなんて……）

灼熱の陵辱液が胃の中で渦巻き、美しい肢体が何本もの陵辱肉で觸られる悦くすぐったさに、希彩の脳が混濁し始めてしまった。

肉の快楽に慣れた胸は、巻きついた触手に縛り揉まれる度に心地いい圧迫感で胸全体を痺れさせ、尖った乳芽に触れる空気だけで、全身が震えてしまうような乳悦感を乳房の内部に響かせくる。入り口を執拗に觸られる秘孔と尻孔は、肉体全てにまで焦燥的な肉痒さを感じさせ、得られない胎内のもどかしさと共に全身の肌を切なくし、大量の発情汗で半裸となった肢体を塗れ光らせていく。

「ふはっ……はあはあはあ……こんな……んっ……はあああ……」

熱い吐息を繰り返し、肉欲に目尻を下げた青い瞳を潤ませてしまふ希彩。唇の端からは精液と混じった唾液が零れて細い顎から滴り、呼吸に合わせて揺れる肉果実を穢してしまつた。

「随分と辛そうな貌をしているではないか、マ○コもこんなにヒクつかせて、そんなに欲しければ、自分からおねだりでもしたらどうかですか？ ひっひっ」

「そんな事……言えるはず……んっ……ないでしょう……」

「そうか、あれほど淫乱にチンポを啜っていた癖に、マ○コには欲しくないと云うのなら、もう触手たちは離しても構いませんな」

胸と淫部、そして桃尻を齧っていた陵辱肉たちが、体液の橋を架けながら肉体から離れていく。触手に吊られたまま肉の刺激を失った肉体は、全身の肌に玉の汗を伝わせながら震え、肌蹴た衣服を淫猥に湿らして男子たちの獣欲を掻き立てた。

「はふっ……ああ……助け……何とかして……」

挿入ほどの快楽ではなくとも、秘孔や尻孔に感じていた悦くすぐったさを失った肉体が、激しく切ない肉疼き襲われ始めてしまった。膣内や腸内では触手蛇に吐かれる大量の淫毒が粘膜の奥にまで染み込み、強烈な肉交への飢えで理性を削り取っていく。

（はくう……耐え切れない……このままでじゃ精神が壊れて……）

感じていた肉悦を失った肉体が熱く、狂疼きに苛まれていく。瞳は挿入を求める切なさに涙まで零れ、腰が二孔に感じていたムズ痒さを思い出すように前後に動いてしまふ。舌

は口腔の残滓を味わうように動き、陵辱を求めた鶉色の乳芽がフルフルと震えた。

「どうだ？ 『ご主人様のチンポをマ○コに挿れてください』と言わなければ、ずっとこのままですぞ、雌犬」

（くうう……そんな酷い……今まで嫌だつて言っても犯してきたのに……でもこのままじゃ……わたし本当におかしくなつて……セックスしか考えられなく……）

「お願い……お願いしま……す……」

肉欲に我慢ができず、淫欲に掻き乱される脳が耐えようとする意思に反して唇を動かしてしまった。だがそれを止めようとする気が起こらない。美女教師は、肉体の火照りに苛まれたまま身を震わし、自分の唇から勝手に流れていく言葉を聞き続けた。

「ごっ、ご主人様の……大きなペニス……淫乱なわたしの……はしたないオマ○コ……オマ○コに突き刺して、奥までっ、奥まで掻き混ぜて精液を注いでくださいっ！」

「ひゃひゃひゃっ！ 我慢できずにやっぱり言いおったか、この淫乱め。望み通りその雌孔マ○コを子宮まで貫いて、腹が膨らむまで精液を注ぎまくってやるわい！」

「ああ……っ!？」

語尾を強めて叫んだ言葉に、ニタニタと笑った学園長が触手を動かし、濡れていたハイレグショーツのクロッチを盛り上がっていた淫唇に引っ掛けていく。

下着をずらされていた巨峰乳は、乳辱を求めてベル型の美しい柔房を大きく揺らし。股布から剥き出されてしまった淫部は、肌濡れついた亜麻色の草むらと、左右に広げ開い

た淫唇、そして薄色の秘粘膜と小さく口を開けた秘孔まで空気に晒してしまった。

吊られた状態でのM字開脚だった為に、男たちの視線は桃尻の割れ目で佇む窄みにまで突き刺さり、肉交に期待する希彩の性感を昂らせてくる。

「いくぞ希彩。お前の処女を奪ったチンポだあ、淫らに喘ぎ悶え、イキまくりながら触手たちを産み落としたりがれっ！」

ジュブッ！ ジュブジュブジュブジュブウウウウウウウッ！

「ぎゃひっ!? 挿入ってくる……太いのがわたしの膣内に……あぐッ……裂ける……裂け……ひぎいいいいいいいいいいいい——ッッッ！」

秘孔を埋め込むように広げ、駅弁の体位で膣内に突き刺さってきた長ペニスの太さに、処女を失った時のような痛みを感じた退魔巫女は、喉を仰げ反らせながら甲高い声で叫んだ。膣は今まで経験した事のない拡張を感じ、壁や壁が捲り擦られながら異質な雄槍の業熱と太さを覚え込んでいく。

「はひいいッ！ 太い……大き過ぎるうううッ！ 中が……奥までッ！ あうッ……はあはあはあ……ッ……スゴ……イ……」

息が詰まりそうな拡張感で狭い膣を貫かれ、拳大の亀頭がゴム輪のような子宮口に填まり込んだ瞬間。膣のはち切れそうだった痛みが消え、壁や壁が擦られる強烈な悦痒さが脊髄を駆け登り、熱くなった脳を直撃してきた。そのあまり肉刺激に美女教師の肉体は半痙攣しているかのように震え、秘孔と肉幹の隙間から濃い女蜜が噴き出してしまった。

「突き刺しただけでこんなに儂にモノを喰い締めおって、もつと奥まで貫いたらどんな声で鳴くんじゃあ？」

「はぎッ！ もうむり……奥まで挿入ってるのに……これ以上なんて……ひゃあぁッ！」

ジュズボッ！ ジュズジュリユジュプウウウウウウツツッ！

「はぎい————ッ！——ッ！——ッ！」

子宮口に填まった亀頭が硬い入り口を強引に押し広げ、希彩の聖なる領域に陵辱の切っ先を押し込んできた。男を知らなかった最後の孔を貫いた長ペニスは、力強い突き刺しで子宮の奥壁を叩き、彼女の内臓をも押し上げて長肉槍の全てを膣の中に納めてくる。

痛みもなく子宮まで貫かれた快感に、彼女の肢体は弱電流を流されたような痺れが趨り回り、小さな尿道から軽い絶頂に達した女精が噴き出していく。

聖なる場所まで貫かれた至福に、大きく開けた美唇は叫び声もあげられなくなり、見開いた瞳からは歡喜の涙まで零れ落ちてしまった。

「うひゃひゃひゃひゃひゃっ！——なんと具合のよくなった膣だ、処女と変わらないきつさなのに、淫らかな褻がネットリと絡まり、儂のモノを舐め溶かすように蠢いておる」

「くはあアアッ……いいの……奥まで刺さって……わたしもう……もうッ！」

ジュプッ！——ジュリユ……ジュズリユ……ジュボッ……

子宮まで貫かれ、肉交の快楽に抗えなくなった美女の両脚が、その長さを利用して束拿の贅肉腰に絡まり、自ら細腰を動かして雄槍の出し入れをさせ始めた。秘孔が淫らに捲れ



返り、膾炙が無數の膾粒ごと肉幹に擦り潰れる悦刺激に、美唇からは艶めかしい淫声が洩れ、濡れた挿入音と共に教室中に木霊していく。

彼女と同じく、ペニスを触手化され淫毒に苛む男子たちは、目の前で行われる憧れの美女教師と贅肉太り学園長との肉交に目が離せなくなり、今にもその肢体を味わおうと蛇のように陵辱器官を暴れさせ始めた。

「くはあんッ！ スゴイツ……こんな奥まで……あうッ！ もつと掻き混ぜてください……ご主人様のペニスでわたしのオマ○コめちやくちやにしてえええええええッ！」

（生徒に見られているのに……わたしは……でも……もうダメ……犯されてなければもう我慢できなくて……お腹の中が気持ちよくて……もうわたしは……）

男子生徒に見られながら自分の身体を老男に捧げる墮落感と被虐感に、希彩の精神が昂り、自ら動かす腰の動きが大胆に変わっていく。秘孔に突き刺さる淫部は、わざと桃尻の角度を変えて皆に見せるようにし、大きく揺れる峰乳は束拿の貌に押し付け、両手で灰色の頭を押さえながら、尖った乳芽を貪らせて悦痒い乳悦を求めてしまう。

「自分から乳首を吸わせやがって、そんなに儂のチンポがいいのか、この淫乱教師め！」

「はふッ！ はい……あうッ！ いいです……ご主人様のペニスが子宮まで突き刺さって……あうッ！ オッパイも……いやらしいオッパイも吸われるのイひッ！」

退魔巫女の肢体を突き上げ始めた学園長の言葉に、希彩は喘ぎながら素直に答え、淫らに腰を振りながら亜麻色の長髪を振り乱した。秘孔からは太い肉幹が出入りする度に愛液



がしぶき、ピチャピチャと床に滴り落ちる音が男子たちの陵辱心を煽っていく。

「お、俺もう我慢ができねえ」

「俺もだ、マ○コじゃなくていいから、あの身体で射精してえ」

「希彩先生があんな淫乱だったなんて、こんな雌犬に憧れていたなんてっ！」

情欲、肉欲、怒り、憧れ、色んな感情を暴走させた男子たちがペニス触手を動かし、学園長の腰つきに合わせて肢体を上下させる退魔巫女に襲い掛かせてきた。

「んあッ、はうッ、あッ、あッ、はふッ、んう……ッ!? ちよつと待……くうん……ダメ……んああああああッ！」

全身の肌男子の触手根が這い回る感覚に、希彩は耐えられずに嬌声を叫んでしまった。胸には乳淫を求めたペニスが何本も這い回り、大きな肉果実を根元から何重にもなつて巻きつき、絞り揉みながら二つの乳芽を切っ先で転がしてくる。太い肉幹を啜えた淫部には、少しでも粘膜による快楽を得たい切っ先が四枚の淫唇や秘粘膜、そして捲れ返る秘孔にまで擦り付いてきた。

「はくッ！ んん……みんな激しい……あんッ！ もう入らないのにアソコにまで当たっ……ひゃふ……いいよお……」

淫毒に侵された子宮まで長肉槍に貫かれ、幾多の若い触手ペニスにまで肢体を刺された美女教師は、理性を完全に薄れさせて肉悦に身を委ねてしまった。

彼女の手は、捲れたタイトミニで露になった亜麻色の草むらを何本もの亀頭でまさぐら

せ、小指の先大にまで膨らんだ淫核まで捧げて、転がさせながら白ピンクの女芽を剥き出させていく。汗で淫ら光を放つ桃尻は、突き出すように彼らに見せて触手根の肉胴で撫で回させ、谷間で挿入を期待する尻孔へと切っ先を導いてしまう。

「はんッ……誰か早く……早くこっちにも挿入れて……もう我慢できないの……」

両手で尻タブを割り広げ、濡れた声で尻辱を誘う退魔巫女。淫欲に理性を崩し、いつもの理知的な雰囲気を消した淫美女の姿に、数人の男子の淫根蛇が尻孔へと向かい、切っ先を色素の沈着していない窄みに触れさせてきた。

「ふぁあんんんッ！　そこいいのッ！　早く、早く奥まで突き刺して……お尻もメチャクチャにしてえええッ！」

肢体を上下させながら秘孔で学園長の太い肉幹を喰い締め、子宮の奥壁を突き上げられる女痺れに喘ぎながら、生徒のペニスに尻孔を貫かれる背徳的な甘美に身を震わせる。

「先生、俺がそのお尻突き刺してあげるっ」

「何言ってるんだ、尻は俺が突き刺してメチャクチャにしてやるぜっ！」

「希彩先生のお尻、奥まで突き刺して俺の物にするっ！」

数人の切っ先が尻孔の周りで切っ先を持ち上げ、争うように孔へと向かってきた。

「ああッ！　早く……早くお尻を……」

「お前らやめやがれっ！　その尻は俺が処女を奪った俺専用の孔だぜ、貴様らのチンポじゃ、この女は満足などできねえよ」

争い、今にも突き刺さってこようとした男子のペニス触手を止め、今まで見ていただけだった畏蛾が、彼女の桃尻に触れながら背後に立った。ジャージを脱ぎ捨て全てを見せた彼の股間では、短小だったはずのペニスが学園長のモノと同様に触手と融合して大きくなり、膣に収まっている肉槍と同じサイズになって切っ先を天に向けている。

「ああ……大きい……それを……それを挿入してください……」

「言われなくてもご馳走してやるぜ、喜んで受け入れろよ、淫乱っ！」

ずいゆぶッ！ ずりゆりゆッ……ずぶずりゆにゆぶりゆふううううううッ！

「うぐううヴうううヴううヴううヴううヴう——ッ！ スゴひッ……あ

うッ！ 太いのがお尻の奥にまれ……いひのッ……いひいひいひいッッッ！」

太い肉槍で尻孔の皺を広げ、蛇腹状の腸壁に亀頭を詰め込みながらS状結腸の奥壁まで突き上げてきた肉槍に、希彩は精液の絡まった舌を突き出しながら歓喜の悲鳴を奏であげた。同じ大きさのペニスに二孔の際奥まで貫かれ、薄壁を通して擦り合わされた異常快楽に、肢体は激しいムズ痒さに襲われ、膣壁と腸壁に感電にも似た痺れが趨り回っていく。

「ひゃひゃひゃっ、どうだ希彩。処女を捧げたモノで同じ孔を貫かれた気分は？」

「はふッ！ あッ！ あふうううッ……いいれふ……ひゃンッ！ ご主人様たちのモノでオマ○コとお尻がいつぱひれ……もつと……もつろ激しく突き刺してええッ！」

ジュプッ！ ずりゆッジュリユずぶッ！

淫欲に染まった退魔巫女の求めに応えるように、彼女の二孔を犯す束拿と畏蛾が腰を

激しく振って膣と腸壁を擦り、最奥を突き上げながらブラウスを引き千切っていく。人外の大きさを持った二本の雄槍が膣壁を引き千切るように捲り、蛇腹状の腸壁を填まりながら激しいピストンをする度に、上半身をブラだけにした彼女の肉体は蟲に食られているような蟲悦感と悦痺れが趨り回り、脳が快楽を得る事しか考えられなくなっていく。

呂律の回らなくなつた美唇からは、唾液がダラダラと零れて細いおとがいから滴り、生徒のペニス触手に嬲られる乳肌を濡らし滑りをよくしてしまふ。寄せ上げなくてもできてしまふ峰乳の谷間では、先ほどの奉仕を真似た触手根が数本突き刺さり、柔房を大きく揺らしながらピストンを開始した。

「ひゃふッ！ あんんんんんッ！ もふわたし……ただの雌ですわッ！ ご主人様たちのちっ、チンポで気持ひよくなる……ただの雌犬でふ……あむッ！」

肉体の際奥まで貫かれる悦痺れに脳を灼かれた美女教師は、とうとう自分を娼婦へと墮とし、瞳の前でウネウネとうねっていた二本の触手ペニスを両手で握り、淫蕩な笑みでしゃぶり始めてしまった。

慣れた仕種で肉幹に舌を這わせ、亀頭を喉奥にまで呑み込んだ彼女は、喉肌を膨らませながら二本のペニスを交互に口に含み、亜麻色の長髪を振り乱しながら、精液を吸い出そう鈴口を激しい舌先で責めまくる。

肢体を上下させながら全てのペニスに奉仕する彼女の身体は、子宮壁やS状結腸の奥壁を一度突き上げられる度に、歡喜の声で叫びながら激しい女蜜を秘孔からしぶかせた。



「んはあああああッ！ あうッ！ ンチュパッ、むうチュプ……ンぶうはッ！ ああッ！  
いいのッ……イイッ！ みんなのチンポ逞しくつて……はふッ！ もつと犯してッ！ も  
つとわたしをみんなの娼婦にしてエええエえエえッ！」

歡喜に喘ぐ希彩は、全身を半痙攣させながらその美しい肢体を男たちに捧げ続けた。淫  
欲に蕩けた美貌は、眉ごと尻を下げた青い瞳から歡喜の涙を流し、その頬にまで亀頭を  
押し付けられて快楽を与えている。胸下にブラを纏わりつかせただけになった上半身は、  
淫欲を誘う大きな肉果実を上下に弾ませ、縦長のお臍を見せる腹部は、僅かながら内部か  
ら膨らみ、膣内を陵辱する学園長の巨肉槍を突き出している。

「ひゃひゃひゃっ！ マ○コと尻孔にチンポを突っ込まれながら全身まで犯されていると  
いうのに、まだ足りないと言うのか、この雌ブタめがっ！ ならばもつとその身体に突っ  
込んで貰うがいいっ！」

「ふうあああああッ！ あッ、ひゃふッ……なにッ!？」

快楽に喘ぎ乱れていた退魔巫女の瞳に、一瞬理性の光が戻り、淫根をピストンされる二  
孔の周辺で起こった異変に、肉体中に戦慄を駆け巡らせていく。

秘孔の周りで入り口を齧っていた触手根たちが、突如力を込めて太い肉幹で塞がった膣  
内に入り込んでこようとしているのだ。お尻も前と同じように、体育教師の挿入を受ける  
窄みに切っ先たちが群がり、尻孔の皺を押し広げながら腸内に入ってこようとしている。

肉体は快楽の悦流に痺れながらも、更に秘孔と尻孔に挿入されてしまう陵辱に戦慄を覚

え、快楽と恐怖という感情に全身が硬直していく。

「んふッ！ はあはあはあ……やめ……これ以上挿れられたら、わたし壊れ……」

ズジュプッ！ ずにゆりユブズプッ！ どゆすジュプじゅずジュリユウウウウウッ！

「ぐはッ！ ひぎやアああアああアああア—— ツッッ！」

太幹を啜えた秘孔と尻孔を無理やり押し広げ、膣内と腸内に二本ずつ新たな触手根が突き刺さってきた。学園長と体育教師の雄槍と共に体内を削る生徒のペニス触手に、希彩はおとがいを仰げ反らせ、肢体を半痙攣させながら絶命間際のような悲鳴を叫びあげた。

膣に挿入り込んできた淫根蛇たちは、子宮内を犯す学園長の長雄槍に添うように狭い膣内を拡張し、贅肉一つない彼女の腹部を歪いびに膨らませながら、膣襞を擦り千切るような勢いで子宮口にまで突き当たってくる。

桃尻を一回り大きくしながら腸内を貫いた二本は、蛇腹状の腸壁を引き裂くように填まり広げ、体育教師の肉槍と共にS状結腸の奥壁まで貫いてきた。

「くあああッ！ あひッ……スゴイ……お腹の中いっぱい……壊れちゃう……わたしのオマ○コとお尻……はうッ、みんなのペニスで壊れちゃうよおおオオオオオオッ！」

プシャッ！ プシユウウウウウウウウウウ……

一孔に三本ずつ挿入されてしまった秘孔と尻孔から、自分の全てを満たされた膨揚感と肉体を狂わす痛痺れが発生し、脊髄を麻痺させ脳を感電させるような激痺れで貫いてくる。

通常の間相手では得られない肉体の貫かれ方に、歓喜した美女教師の貌には壊れた笑





筋の緩んだ尻孔が何度も捲り返され、三本のペニスがピストンする度に、その激しい肉疼さで彼女を淫獄へと引きずり込んでいく。

「どうですかな希彩、全部の孔の奥まで犯された感想は？」

「んんうんんッ！ んッ、んッ、いふい……んちゅばッ！」

老男が淫質的な声で訊いてきた言葉に、彼女は淫根蛇を口淫したまま何度も頷き、くぐもった声で応えた。駅弁体位の肢体が上下に揺す振られ、三つの孔で触手化した生徒のペニスと、巨大化した束拿と畏蛾のペニスが出入りする度に、彼女の肉体には強烈な女痺れが趨り回り、頭の中が淫色の霧で満たされてしまう。

「こんなにチンポを突っ込まれて喜ぶとは、お前は生来の雌ブタだったようじゃな」

「ふあひ……んッ、あッ、むふううッ！ わらひは雌ぶうられす……はふッ、らからくらひゃひ……ごふゆ人様の精液……いっばひ子宮の中に注いれええッ！」

束拿の侮蔑した言葉に、美女教師は触手に嬲り揉まれる巨峰乳を彼の眼前で大きく揺らし、腹部をポコポコと持ち上げ律動するペニスたちを見せて応えた。

「ひゃひゃひゃっ！ ならばチンポの好きな雌ブタに相応しい恰好で犯し、精液をぶちまけてやるわいっ！」

「んふあああッ!？」

M字開脚のまま吊り、駅弁体位で肢体を上下させていた触手たちが突然緩み、全ての雄槍を挿入したまま彼女の身体を床に下ろしていく。

「二度と偉そうな事が言えない姿で犯してやるわいっ！」

幾多の触手ペニスに陵辱される肉体を床に下ろした束拿は、生徒たちが見やすいように彼女の右足を肩に担いで犬の放尿ポーズにさせ、三本の雄槍触手で満杯になった秘孔を貫き始めた。お尻を突き上げていた畏蛾は、美女教師が犬の放尿スタイルとなったと同時にペニスを伸ばし、生徒と共に腸内を貫いてくる。

「くはッ、あむうんンッ、ンはッ、はうッ、ンふうあああッ！」

（みんなの視線がアソコに突き刺さって……、身体が燃えちやいそう……）

体位を変えられた事で、生徒たちの視線が全ての孔と揺れる巨峰乳、そして腹部に浮き出している淫根に集中してきた。淫らな挿入を受ける淫部の全てを見られた彼女の肉体には、今まで以上の発情熱が籠り、身体が灰になってしまいそうな淫炎が燃え盛っていく。

「ぐうおおおっ！ もうどっかに突っ込まなければ、チンポが破裂しちいまいそうだっ！」

「俺もだっ、チンポがもう限界で、誰か早くぶちまけて退いてくれっ！」

憧れていた美女教師の淫姿に、彼女の肌を切っ先を擦らせていた二人の男子が我慢の限界を叫び、胸谷間や乳肌、そして三つ孔に挿入している男子たちに代わってくれるように叫び始めた。

だが、学園長たちと共に秘孔や尻孔、口唇を犯す彼らも射精が近いらしく、肉胴を脈動させた雄槍蛇を離す者はいない。それどころか、更にペニスの律動を速めて彼女の内粘膜を削り、襷や壁を捲り返しながら肉体を陵辱し始めた。

体内を犯す全ての触手ペニスは、精液混じりの先液を噴き出し、学園長と体育教師の巨肉槍は、薄壁越しに競うように奥壁を突き上げながら陵辱根全体を膨らましていく。

「ンぶふあッ！ あッ、あふッ、むふうんんッ！」

全ての孔に受ける激しい肉突きに、希彩は全身を弱電流に支配されたように痺れさせながら、膣と腸を激しく蠕動させ、子宮内の亀頭に収縮する壁を絡ませながら絶頂に向かい始めた。濡れた呻きを洩らす唇は、口腔にある亀頭を可憐な舌で舐めまくりながら、喉をきつく締め付けて胃に入った肉幹を抜く。

犬の放尿スタイルで、激しく突かれる半裸の肢体は、全ての口が捲れ変える度に体液と汗が大量に飛び散り、挿入できない男子たちの射精欲を高めていく。

「うはあふッ！ んッ、んッ、んッ！ もつろッ……もつろおおおッ！」

自分を犯すペニスたちの脈動を感じながら、潤んだ瞳で孔を求めて悩む男子を見つけた彼女は、少しでも彼らに快楽を与えようと幾多の触手に揉み廻られ、深い谷間を何本もの触手根で陵辱される巨峰乳を向け、カウパー液にまみれた鶉色の乳芽を差し出した。

「擦ってやるッ！ 希彩先生の乳首で擦りまくって白く染めてやるッ！」

「挿入してやるッ！ 無理でもなんでも、そのオッパイを犯してやるぜッ！」

射精の欲求に理性を飛ばした二人の男子が、乳首に突き刺すように切っ先を擦り付けてきた。先液をまぶしながら乳芽を執拗に転がす二つの亀頭に、希彩は胸全体を激しいムズ痒さに包み込まれていく。

(はふううううッ！ 乳首が気持ちいいわッ！ オマ○コもお尻もよくって……息苦しいのにッ……生徒のペニスが美味しく感じてッ！)

射精を間近にして震える幾多のペニスに陵辱されながら、彼女は今までにない蟲惑的な快樂に身を染めていた。全てのペニスを自分が気持ちよくさせ、射精させるといふ被虐的な興奮に、淫根に刺激を与える肉体の全てが感電したように痺れていく。

「ひゃひゃっ！ 乳首まで生徒のペニスで擦り遊ばせて、そんなに嬉しいのか淫乱」

「ならばその小せえチンポで、乳首突き刺して貰いやがれっ！」

射精を堪えながら腰を振る二人の陵辱教師が、上半身に残っていた黒いブラを引き切り、荒い呼吸を繰り返しながら話しかけてきた途端。二つの乳芽を觸っていた射精間近の生徒触手が、突如その大きさを小細くし、龟头をペン先大にして頂に觸れてきた。

「気になる事あねえ、その小さくなったチンポでそのエロ乳首を貰いてやれっ！」

「んふうううッ!? んッ、んふうあッ！ らにを言っれ……はむッ、んッ、んン……」

乳首に挿入される異質な行為に、熱くなった背筋が一瞬冷たくなる。だがそれも束の間。新たな場所を貫かれる期待に、淫欲に染まった美女の心が昂ってしまった。

「へへ……希彩先生のオッパイ処女、俺が貰いてやる……」

「出すからね、オッパイの中にすぐに射精するからねっ！」

ジュプツジュリユニユリユプウウウウウウウウウウウウッ！

「むひゅあッ!? ンむんんんんんんんんんんんんんんんんんん——ッ——ッ——ッ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**